



足場が不安定な急な斜面を、重いカメを頭に載せて水汲みに行く女性（中央右側）



○国名：パキスタン・イスラム共和国 ○首都：イスラマバード
○人口：2億777万人（パキスタン統計省国勢調査2017）○面積：79.6万km²
○人種・民族：パンジャブ人、シンド人、バシュトウーン人、バルーチ人
○言語：ウルドゥー語（国語）、英語（公用語）○宗教：イスラム教

ここはパキスタン、クラム管区。
湧き水の水源までは、
歩いて片道1時間かかります。
毎日最低2往復
この重労働から解放されると、
できるようになることがたくさんあります。
学校に行ける子どもも増えるかも知れません。

水汲みから
自由になると...

再発防止策実施の経過報告



JENは、厳しい状況にある方々への支援に励む傍ら、ヨルダン事務所における不適切な執行を受けて、役職員一同、再発防止策の実行にも注力しています。

再発防止策は、多岐にわたります。主に、4つの分野で実行しています。

- 1) JENという組織の存在意義の確認
- 2) 人道支援を実施する上での基本的な理解促進
- 3) 事業や組織の運営における管理や手続きの改善
- 4) ガバナンスの改善

ただ単に、起こったことを防ぐ規則を作っても、全ての役職員がその規則の意味や、なぜ作られたのかについて同じ理解をしていなければ、規則の守り方に差が出るだけでなく、適切に守られないことになってしまいます。そこで、JENが何を大切にしているのか、それはなぜなのか、大切なものを大切にするためにどのような行動をする必要があるのかなど、根本的な所に立ち返って理解し合い、皆で話し合いながら実行しています。

その道具としてとても有効なのが、『人道支援の必須基準』（Core Humanitarian Standard 以下CHS）です。世界の人道支援の現場で、様々な分野の多種多様な基準が設けられてきましたが、その比較的多くの部分を統合したものとして活用されています。JENの役職員も、CHSの研修を実施して、互いに学び合い、理解を深め、より質の高い支援を目指しています。

書き損じのハガキや未使用の切手はありませんか？

あなたの未使用の（書き損じた）年賀状や官製ハガキ（郵政ハガキ）または、未使用切手をJENの東京本部にお送りください。JENの支援活動のために活用させていただきます。



〒169-0073
東京都新宿区百人町1-21-20
特定非営利活動法人ジェン「ハガキ・切手係」

お宝エイド

使わなくなったアクセサリー、貴金属、カメラなどの“お宝”をご寄付ください。

www.jen-npo.org/otakara-eido/



BOOK MAGIC

ブック・マジック

JENとブックオフオンラインによる、今すぐカンタンに参加できる寄付プログラム。

www.jen-npo.org/bookmagic/



Fashion Charity Project

ファッション・チャリティ・プロジェクト

ファッションアイテムを「寄付」または「買って」社会貢献。

<http://www.jen-npo.org/fcp>



本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

下記の住所へ事務所を移転しました

今回ニュースレターをお送りする際に使用している封筒の記載住所は旧住所となります。修正に要する費用などを勘案した結果、封筒に表示する住所については、当面古いままで使用し続けることといたしました。皆さまにはご不便をおかけいたしますが、ご理解賜われますようお願い申し上げます。

「パキスタン」

支援活動の背景と

パキスタン、クラム管区の状況

「豊かな水資源を適切に活用出来る暮らしをめざして」

パキスタン、クラム管区の奥地は、緑あふれる森と水源に恵まれた所です。にもかかわらず、その水を村や家に運ぶパイプが引かれていないため、遠くの水源まで水汲みに行かなければなりません。パイプが引かれている場所でも、破損や摩耗のために、せつかくの水が汚染されていて、人々は恩恵を受けることができません。

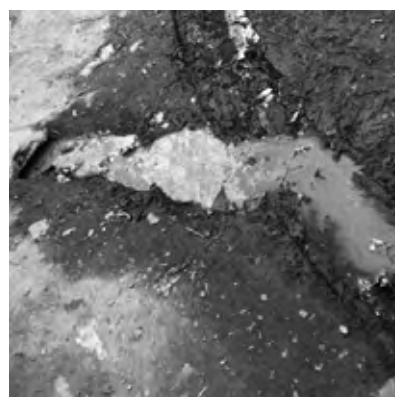
この地域でも水汲みは、伝統的に女性や子どもの仕事になっています。岩がごろごろしているような急な斜面を通るため、重い甕を頭に載せて水汲みに行くのは重労働だけでなく危険で困難です。冬には雪も積もって滑りやすくなり、危険は更に増して、時には怪我をしてしまうこともあります。それでも家族全員の水を確保するためには、毎日何度も往復しなければなりませんし、水汲みを休むことはできません。時には、水汲みなどの家事のために学校に

通うことを諦めなければならない子どもたちもいます。

各家にトイレはあるのですが、十分に水を使えないため、トイレの衛生状態も悪くなっています。衛生の問題はこれに留まりません。戦闘によって住む人がいなくなった期間、適切にメンテナンスが出来ていなかったために様々な設備が破壊され、部分的に存在していた排水溝も劣化し、汚水が漏れ出してしまっています。更に、ゴミ処理のシステムもこの地域までは及んでいないため、空き地に廃棄物が投げ込まれていて、これも水質や環境汚染の原因になっています。その結果、水を原因とする様々な感染症にかかる人も後を絶ちません。

これらの問題を解決するために、JENは、水源の保護、給水施設や衛生施設、排水溝の建設や修復など、様々な水質改善の事業を行う

傍ら、水管理委員会の形成を促しています。研修によって委員会が自力で施設の維持管理ができる力を身に付け、一人ひとりの住民が不衛生な環境から身を守るように衛生啓発活動を実施しています。パートナーであるUNOCHAと共に、水衛生施設の建設や修復を担い、人々が一日でも早く、自宅の近くで水を汲み、安全な水を飲めるように、支援活動を行っています。



排水溝はカバーされていないため汚染が心配

VOICE

JENと共に
困難に立ち向かう

受益者の声：イードヌールさん(50才)
場所：旧連邦直轄部族地域(FATA)、クラム管区

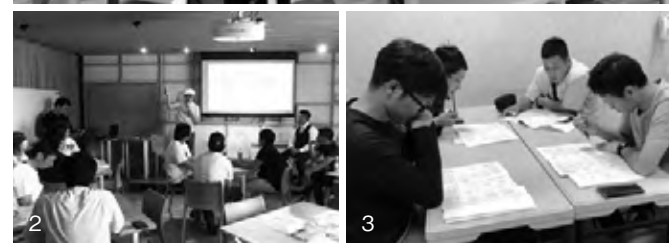
ヌールさんは、クラム管区中心部から30キロに位置する山の中にあるソマナ村に住み、3人の子どもがいます。彼は社会活動家でもあり、村の社会福祉活動に活発に参加をしています。日頃の熱心な活動ぶりを知る村人たちは、彼をJENの水衛生委員会の会長に選びました。

彼はJENの調査やコミュニティへの働きかけの手助けや、水源の所有権に関する問題を解決する重要な役割も担ってくれました。「村人の多くが農家や日雇い労働者で、生活が困窮しています。私たちは自分自身でこういった計画を立ち上げる能力がないのです。かつて自分たちでそれらを建設しようと試みましたが、自分たちの経済力をはるかに超えたものであるという事に気づきました。JENやUNOCHAによる水衛生施設の建設は、私たち村全体にとってとても大きな救済です」。

「熊本」

農業で持続可能な未来へ

JENは熊本の一般社団法人フミダスとパートナーシップを組んで、熊本地震から立ち上がるなか、未来を見据えて持続的な地域をつくるイノベーターたちを支援しています。最新のプロジェクトが、若手農家による、若手農家のための事業承継研修「マイファーム・マネジメント」です。20代・30代の農家で構成される熊本青年農業者クラブ(4Hクラブ)のメンバーは地震後、農業設備が壊れ、しばらく農作物の流通も止まった経験から農家の経営力強化の必要性を痛感したといえます。経営力を強くすれば自然災害はもちろん様々なリスクに対応していけます。これから先、大規模農業法人の進出や安い海外農産品の輸入等、いくつも試験が待ち受けています。それらを踏まえ、プロジェクトでは4Hクラブの役員自身がファシリテーターとなつて、若手農家に対して「10年後の自分と家族はどうありたいか」「どうやったら親を説得できるのか」「そのためにはしっかりと事業計画を立てなければ」と具体的な事業承継



1.参加者同士で現状を共有(写真_フミダス) 2.ファームマネージメント勉強会(写真_フミダス)
3.事業承継ブックに落とし込む作業

計画をワークショップで進めていく研修プログラムを完成させました。この研修プログラムを機に親と話し合いが進み新しいビジネスプランのもと、事業承継を始めていたり、既に経営者の立場に立っていた若手農家がさらに経営力を磨くなど、目に見える成果がありました。熊本初の農家の事業承継支援。これは、高齢化と

廃業に頭を悩ます熊本の農業界全体にとつても重要な取り組みです。2016年4月14日に発生した熊本地震から3年間、JENは緊急から復興まで支援を続けて参りましたが2019年2月末をもって熊本事業は完了しました。皆様の暖かいご支援に心から感謝申し上げます。

CHS
内部勉強会

パキスタン事務所内でのミーティング時の様子

JENは各事務所で、『人道支援の必須基準』(Core Humanitarian Standard以下CHS)の内部勉強会を実施しています。各事務所ごとに持ち回りでリーダーを決めて、自主的にCHSを学んでいます。

また「内部通報の仕組み」を新たに整備しています。この仕組みが出来上がり、通報窓口が適切に周知されれば、受益者やスタッフが率直かつ自由に情報提供を行うことができるようになります。同時に、独立した客観的な立場から問題を未然に防ぐためのサポートが可能になります。外部専門家に相談もしながら、慎重に進めています。